

巻頭言

超大型機特集号を出すにあたって

淵 一 博*

今回、「超大型機」に関する特集号を出すにあたって、まず、特集企画のいきさつにふれて、その目的を明らかにしたい。

情報処理学会の活動は、情報処理技術全般にわたるもので、たとえばソフトウェアの分野に限られるわけではない。ハードウェアもアプリケーションもカバーしようというわけであるが、しかし、現実に会誌にみられる論文解説などの主体はソフトウェアであるということができる。

これは、会員の構成自体、ソフトウェア関係者が多いこと、またその比率がますます増加しつつあることの反映であるともいえる。ハード関係の会員も多いのであるが、システムが大規模化するにつれて、ハード、とくにシステム構成に関することがら論文になりにくくなってきている事情などもあり、ハードウェア技術における活動が、会員全体の眼にふれる機会が少なくなっているという現象が認められる。

一方、技術の専門化がすすむにつれて、他分野の要領のよい紹介が求められる傾向がふえている。ソフト関係の読者からすれば、ハード分野の全容を知るには論文だけでは難があり、適当な解説を求める声が会員から寄せられることが多くなった。

この問題は理事会でも議論され、「超大型機」についての紹介を行なうことが編集幹事会に示唆された。編集幹事会では、これを積極的にとりあげ、ここに解説論文による特集を組むことが決定されたのである。

超大型機は、計算機技術の最先端を示すもの（のひとつ）であり、一般の関心も深い。技術者にとっても限界への絶えざる挑戦のテーマとして夢かきたてられるものということができよう。ただ、超大型機といえども商品（ないし商品化をめざすもの）と考えるかぎりは、採算、市場の制約が課せられるという事情から、企業内技術者としては自戒し、夢を胸中のみおさめようと努力しているというのが現状のように感じ

られるが、なお、胸からあふれようとするものの対象ではあるまいか。

超大型機をめぐるには多くの論点がある。第一は、範囲の問題である。解説は現実のシステムの紹介から出発するから、大型機が対象と思われるかもしれない。まだ「実現していないもの」を「超」大型としたい気分もあるからである。また、単体としての計算機と、超大型「システム」の関連も問題になるだろう。

超大型の、方式との関連はどうであろうか。気も遠くなるように複雑な方式をもつのが超大型なのであるうか。

これらの問題は、これまでの方式的努力の紹介とともに、各論文で論じられている。超大型の問題をどうとらえるかというのは、読者自体の問題であるといえるかもしれない。その目的には、この特集号は、読者が考えるための材料を豊富に提供しているともいえるう。

この特集号の実現には多くの方々の積極的協力を得た。座談会出席者、執筆者の方々には、ご多忙にもかかわらず時間をさいていただいた。とくに、元岡先生には、企画全般につき相談のついでいただいた。また相磯先生は、企画立案・座談会編集などをお願いし、実質的な編者であった。また真子ユリ子さんにも、いろいろお手伝いをお願いした。深くお礼申し上げる。

筆者が編者の形をとったのは、読者に対する責任のためである。実はこの特集号では、掲載のもののほか、ソフトウェアの問題、記憶制御方式についての二論文を予定していた。しかし、執筆予定者の多忙のため実現できなかった。とくに後者は筆者自体がひきうけて果たせなかった。企画の全容を実現できなかったのは、ひとえに筆者の努力不足であり、読者ならびに協力者の方々に深くお詫びする次第である。

にもかかわらず、この特集号に多くの有益な論文が掲載でき、読者にとって十分役に立つものになったと信ずる。
(昭和46年7月8日受付)

* 電子技術総合研究所パターン情報部